

福岡大学医学会ニュース

第17号

福岡大学医学会

福岡市城南区七隈
福岡大学医学部内

印刷 福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂一丁目10-15

医学部入試適性検査

注目されつつある福大方式

松岡 雄 治



大学入試制度の改革がいろいろ取沙汰されている中で、本学医学部で昭和五十六年度入試から実施している「適性検査」がいま、全国的に大変脚光を浴びてきています。しかしその割には学内の皆さんは適性検査の実体がどんなものかあまり御存知ない向も多いため、そこあたりを配慮された三好学部長から、紹介記事を書くようにとの御指示がありましたので、簡単に要約することとします。

導入の経過

本学部で実施している適性検査はアメリカの New Medical College Ad-mission Test (New MCAT) といはれ、science knowledge, science problem, skills analysis の三つよりなるの中の skills analysis を導入したものです。当時の医学部長西園教授が昭和五十六年に米國医学教育視察に出向された際 skills analysis に着目されたのを契機として、医学部教務委員会を中心に研究を重ね、昭和五十六年度入試から実際の入試判定に用いることになりました。医学部入試が一次と二次に分かれていた間は二次試験の一つとして一次合格者のみに実施し、一〇〇点満点と一〇〇点試験の学科四〇〇点満点に加算して合否判定に用いていました。二次試験が廃止された後は、全受験生に実施

の、学科三〇〇点、適性検査一〇〇点計四〇〇点満点として合否判定が行なわれていいます。適性検査が四分の一の比重を占めることになりました。なお推薦入試では学科一〇〇点と適性検査一〇〇点の計二〇〇点満点になり、二つの一の比重をもちことになりました。

よい臨床医の育成をめざす教務

新教務委員 有吉 朝美



今年五月、盛岡市で行われた日本泌尿器科学会総会の合間をみて、石川啄木の郷里である玉山村を訪問した。啄木記念館で遺作となった「悲しき玩具」の直筆ノートのコピーを入手した。その中に医師として見逃がせない一語があった。

「廻診の医者の遅さよ、痛みある胸に手をおきて、かたく眼を閉つて。」と出版された歌のオリジナルは、

「廻診の医者の遅さよ、眼をとめて、胸の痛みを、ちつちつとこらへる。」

においても、解答に必要な情報は全部問題の中に含まれていなければならない、言い換えれば設問の解答に予備知識を全く必要としないという大前提があります。これが適性検査の最も特徴的な点といえます。従って出題の範囲を高校の教育内容に即して制限する必要は全くなく、広範囲な多岐にわたる題材の中から問題を作ることでありますが、逆に判断の根拠に大人の常識や医者の常識などがはいることにならないよう注意も必要になります。また問題処理の迅速を要する試験であったり、受験生に十分考える時間を与える必要があり、かついつの間にか十分もかけるわけにはいきませんので、二〇〇分の一〇〇問という現行制度でちょうどよいというのがあります。

よい臨床医の育成を

新教務委員 有吉 朝美

業をサボり、試験期間だけ付焼刃の勉強をするような学生は要らない。

伊東京大教授(経済学)は医師の条件として「頭健全、優しい心、まずまずの頭」を挙げた。特別シャープな頭でなくともよい。医療は故山岡憲二九大内科教授が言われたように、「実践を伴った人間愛」である。患者の苦しみ、悩み、弱さに毎日同情し、共鳴し、世話をすることが基本である。しかし、これだけなら盲目的母性愛と変わりはない。医療のプロとなる者は、医学を学び、盲目的なケアや呪術を科学にしなければならぬ。優しい心とまずまずの頭があれば十分可能な筈である。

来年度から入試の方法が二点変更された。小さい語句の

に偏りすぎていることへの反省であった。医師の資質として、記憶力は重要な欠の資質です。しかし現行のほとんどの試験という試験は、資質としての記憶力をみているのではなく、単に記憶され蓄積された知識量をみているに過ぎないのです。記憶した知識量が足りないと思ふものはそれを補うために塾通いをしたり、浪人したりしなければならず、ここに現在の日本の教育制度の歪みの根をみることが出来ます。適性検査は記憶した知識量をみるのではなく、受験生の理解力、判断力、問題解決の能力をみようというところに、最近全国的な関心を集めている理由があるように思ふ。

よい臨床医の育成を

新教務委員 有吉 朝美

道な学習態度の評価である。新しい選考方法を活かすよう積極的に運用し、良質の学生を迎え入れたものである。

増え続ける医学情報、限られた教育期間で、どう消化したらよいか。現在の泌尿器科で使っている教科書は二百八十頁(四十万字)で、三十年前に比べると七倍の増加である。教科書としてはもったいないボリュームでもよいと思ふ。だが現在発行されている専門誌は、主要なものだけに絞っても年間一万頁(三千万字)を超えている。これを精読することはできないが、必要な時に必要な情報を取り出す方法を知ってほしい。学生時代の知識だけでは医療の現場で役に立たないし、仮に役立ったとしてもリタイアするまでの四十年余りを暗なる筈はない。受持患者の病気について、自ら必要な情報を集め、消化し、工夫を加えるのが臨床医の責任であり、生涯

か? 研究班で一貫して追求してきた問題ですが、現在のところ明確にこのような能力をみているのだといった結論は得られていません。しかし次のような事実はこのテストが受験生のかなりの基本的な能力をみていることを示唆するものと思われまふ。それは、入学後の留年の有無と適性検査成績とに明らかな相関がみられたこと。学生の生活態度に積極性と自己規制の有無に相関があるらしいこと。高学年になるほど適性検査の得点が高くなること。各大学ごとの平均値が高い相関があること。また各大学の国試合格率ともかなりの相関がみられることなどです。記憶した知識量とは関係ない、もっと本質的な能力をみていることを示していると思ひます。

福岡大学医学会例会の報告

第18回例会

日時 昭和63年2月3日(水)

午後一時〜三時

場所 福岡大学医学部臨床大講堂

座長 奥村 尚 教授

1. 「組織損傷修復における細胞外調節因子」

眼科 林 英之 講師

2. 「輸血と赤血球機能」

生化学第二 濱崎 直孝 助教授

3. 「ミシガン大学について」

泌尿器科学 大島 一寛 助教授

4. 「アメリカ体験記」

大学システムとアメリカ人」

歯科口腔外科学 都 温彦 教授

将来の展望

現在の大学入試制度がまともなもので、このままで良いと考えている人は誰もいないと思ひますが、それだけに適性検査の評価は今後益々大きくなると思われまふ。全国的な規模で具体的どのようにな形で実施されるようになるか全く分かりませんが、受験勉強を全く必要としないという一事をみても、また自分で考えねばならないテストである点からみても臨教審の答申などより、より根本的な、本質的な面での現在の入試制度に一石投ずることになるものと思われまふ。

よい臨床医の育成を

新教務委員 有吉 朝美

自由な体験をすすめる。このような考えは、科目の選択自由度につながるものである。各科目一駒づつをみせるよりも、あるべき医療の姿と現実を、いずれかの科でしっかり体験した方が価値があるのではなからうか。内科、外科、産婦人科、小児科などの基幹科目は全員必修すべきであるが、例えば泌尿器科は、六年次の一部の学生が、三〜四週間づつ来て貰えばよい。全員が匂いだけ嗅いで去って行くよりも、一部の人がしっかり味わって貰いたい。

第四に、病院を充実し、スタッフが真摯な医療を実践することである。後輩は先輩の背中を見て育つ。究極の背中は各科の長の臨床に究極の姿勢である。ボリクリにおいで、患者を横に置き、教授と学生達が対座して教育センター

診療をするのは時代遅れとなった。現代では患者対医師という診療の流れの中で、学生は学び取らなければならない。病院の多数の医師たちが、その能力を發揮できる場所とシステムが欲しい。生甲斐を感じて働いている姿は、最も魅力ある人間の姿である。学生にやる気を起こさせるための条件を私なりに述べてみたが、いずれも相当の努力と発想の転換が必要である。ある学生が「僕たちは先生たちに信頼されていないのが一番残念です。」と語ったのが耳から離れない。医療も教育も、エネルギーの原点は相互信頼にある筈である。学生諸君を信じて明日の福大医学部を築き上げてゆきたい。

(二頁より続く)

リサーチビジターからの声の欄

福大に学んで

名古屋大学医学部大学院生
第一外科 向山 博夫

お、こちらにきた頃は数多く利用させてもらおうと思っていたのですが、あまり利用できずに終わりました。皆さんも忙しかったためか、利用者が少ないような気がして惜しまれます。

私は、昭和六十二年二月から六十二年三月まで、大学院交換制度による大学院特別聴講生として第二病理学教室にて主に血管平滑筋細胞を用いて、細胞培養を勉強させていただきました。

今回初めて福岡に参りました。最初に感じたことは道路事情が悪いことでした。しかしそれを除けば食べ物(特に魚)は新鮮でおいしく、物価も安く、車で海にも山にも行け、また気候的にも住みやすくておすすめです。

研究面では、アニマルセンター、アイソトープセンター、総研等の施設を利用していただきましたが、まず驚いたのは図書館、視聴覚センターのすばらしさでした。図書は雑誌の種類が豊富で、新しい単行本も多く揃っています。名古屋大学(以下名大)では学生の夏、冬、春の休みに合わせて各々一週間の休館日があり困っています。休館日が少ないのも助かりました。視聴覚センターはすばらしい設備を備えており、こちらにきた頃は数多く利用させてもらおうと思っていたのですが、あまり利用できずに終わりました。

南川 博道

昭和二十五年十一月十六日生、本籍は佐賀県。県立城南高校卒業、久留米大学医学部に進み、昭和五十二年三月卒業。直ちに福大整形外科教室入局。

父が市内で整形外科病院を開業しているため高岸教授のお世話になることになり現在に至っています。

丁度入局した昭和五十二年は福大一回生が卒業する前年に当り、六月の新人局は一人一人と言ふ寂しさでしたが忙しさに追いつかれ、孤独感を感じる暇もなく二年間の研修が終了したような気がしています。

研修をすませて大学院に進み、高岸教授より『胸郭出口症候群』のテーマを頂きましたが当時の私にとってはこの疾患の把握が難しく何と漠然として居り、また手術助手としての手持ちが大変だったと言ふ事しか頭に残っていないようです。

私の二年半

中国新疆ウイグル留学生
帕爾哈提・阿部都

中国が一九七九年より海外への開放政策をとってからの新強に次々と訪問して来たとあつたのは一九八一年です。その時は日本語は一言も分からなかったのですが中国語が上手な先生の「日中両国は一衣帯水近隣です。長い友好の歴史を持っています。友邦の生活習慣には似通った所が沢山あります。例えばご飯、うどん、箸を使うなどみな同じですね。日本人は中国料理が好きです。日本には中国料理店が沢山あります。」と言われ、心なやみました。

現在日本における医学研究と教育を紹介してくれました。私は聞いて非常に嬉しく感じました。中学時代より日本に興味を持っていた私は自分で日本の歴史と文化を勉強し、勉強すればするほど日本に留学したいという気持ちが強くなりました。一九八四年に新強は初めて日本に留学生を派遣する事を決めました。

新強には日本語の学校がなく、また日本語は勉強すればするほど難しかったのです。私は自分の夢を実現するため留学する条件として必要な日本語を一生懸命勉強しました。やっと国家海外留学の厳しい試験に合格して政府から日本に第一回留学生として派遣され、福大に受け入れてもらいました。

基礎と臨床医学の発展した日本に勉強するの大変な事でした。その当時の福大副学長(現学長)宮野先生は私を何回も呼んで私の研究及び生活について親切に指導して下さいました。また沢山の先生方に教えて下さり、私に指導して下さいました。福大の責任ある地位にあつてお忙しい先生が一人の留学生のことを心にとめて下さり、実験室では宮本先生から指導を受けられるようにして下さいました。古川教授の御指導をはじめ皆様方の御陰で気持ちよく沢山勉強する事が出来て半年という短期間で学会発表させて頂きました。古川教授は私の全ての事について大変お世話して下さいました。だから私は心の中を尊敬すればするほど心の暖かいかげがえのない素晴らしい先生だと思つております。今後福大での勉強を続けて日本人の暖かい心と好意により得る事が出来た高度な実験技術と研究成果を日中友好のため、新強医学研究発展のために活用するよう努力したいと思います。卒業して国に帰っても福大での楽しい留学生生活はいつまでも私の心の中に残るでしょう。

福大頑張る!! 私学の平均を上回る

第八十二回 医師国家試験合格者

昭和六十三年四月二日、三日に行なわれた第八十二回医師国家試験に本校から百四十五名が受験し、百八名が合格した。合格率は七十四・五%で私学の平均値七三・六%を上回った。

- 合格者の研修先は(福大病院研修生は科名のみ)次のとおり。
- 荒木 敬一 内科二
 - 有水 淳 整形外科
 - 栗津 諭 長大外科二
 - 石蔵 礼二 九大精神科
 - 磯部 尚志 京大外科二
 - 今井 一彦 整形外科
 - 今村 明秀 耳鼻咽喉科
 - 大城 真也 脳神経外科
 - 岡 芳彦 内科一
 - 岡田 茂 長大皮膚科
 - 岡村 一幸 長大整形外科
 - 小笠原長正 長大内科三
 - 鬼塚美由樹 眼科
 - 小野 隆宏 大分医大内科
 - 小野 民子 佐医大小児科
 - 小野 美雪 内科二
 - 鐘ヶ江重宏 泌尿器科
 - 金田 宏和 奈良県立医大耳鼻科
 - 亀甲 真弘 鹿大内科一
 - 河瀬 晴彦 岐阜大内科一
 - 河野 弘志 久大内科二
 - 喜々津恭子 国立長崎中央
 - 木本 伸子 内科二
 - 金城 渚 琉球大
 - 國本 泰男 精神科
 - 久保 貴子 鹿大内科一
 - 倉堀 純 兵庫医大
 - 四宮 義浩 外科二
 - 末村 恵子 広大内科一
 - 杉原 基弘 広大内科一
 - 周田千代子 麻酔科
 - 早田 哲郎 内科一
 - 竹内 俊夫 佐医皮膚科
 - 竹尾 浩真 外科二
 - 武末 佳子 眼科
 - 武田 誠司 内科二
 - 竹村 聡 筑紫病院内科
 - 多胡 典郎 整形外科

- 山下 喜史 広大内科一
- 山田 隆司 心臓外科
- 山田 美加 筑紫病院内科
- 大和 浩 内科二
- 吉永 康照 外科二
- 脇山 哲史 内科二
- 赤松 稔 大分医大外科
- 田所 久徳 香医大内科一
- 田中 彰一 九大内科一
- 富松 英郎 産医大内科三
- 中村 浩 外科一
- 中村 安俊 鹿児島市立病
- 名越 敏郎 院産婦人科
- 西田 富昭 宮医大内科一
- 橋口 恭博 熊大代謝内科
- 島山 定宗 筑紫病院内科
- 平塚 俊樹 内科二
- 藤岡 靖也 熊大内科三
- 藤原 隆 長大外科二
- 堀川孝二郎 外科一
- 益崎 隆雄 外科二
- 松尾 勝一 外科一
- 三浦伸一郎 内科二
- 石田 良克 九大内科三
- 南 昌江 東京女子医大
- 本村 明 筑紫病院内科
- 森 俊介 九大産婦人科
- 森 宣陽 長大外科二
- 山下 喜史 広大内科一
- 林 伸昭 筑紫病院内科
- 原野 和芳 内科一
- 井廻 宏 内科一
- 内田 俊毅 内科一
- 比嘉 顕秀 整形外科
- 山戸 康司 小児科
- 樋口 史彦 筑紫病院内科
- 栗屋 信仁 山医大内科
- 陳 輝璋 整形外科
- 宮之原正和 内科一
- 山口 尚志 金沢大眼科
- 赤城 哲哉 徳州会病院
- 宇都宮 至 久大内科一
- 作 良彦 宮医大外科
- 桜井 景紀 鹿児島市立病
- 高橋 宏 産婦人科
- 古瀬 達人 心臓外科
- 戸原 震一 熊大眼科
- 豊島 学 鹿大ハビリテーション

教室紹介

福岡大学生化学第一

一、人員構成、松岡雄治教授、黒木政秀助教授、黒木求助手、立石力子助手、池田正一助手、松尾佳野教育技術職員、以上六名の職員の外に外部企業からの受託研究員が常時三、四名いますのでほとんど賑やかです。

二、研究テーマ、主たる研究テーマは癌胎児性抗原(CEA)です。CEA及びその関連抗原の化学構造の解析、生合成や分泌機序の追求、多数のモノクローナル抗体の作製とそれを用いた抗原構造の解析など、基礎的な研究と共に、得

一、人員構成、松岡雄治教授、黒木政秀助教授、黒木求助手、立石力子助手、池田正一助手、松尾佳野教育技術職員、以上六名の職員の外に外部企業からの受託研究員が常時三、四名いますのでほとんど賑やかです。

二、研究テーマ、主たる研究テーマは癌胎児性抗原(CEA)です。CEA及びその関連抗原の化学構造の解析、生合成や分泌機序の追求、多数のモノクローナル抗体の作製とそれを用いた抗原構造の解析など、基礎的な研究と共に、得



「これは昨年迄続いていたのですが、種々の腕神経叢及び口症候群の臨床的および解剖学的検査を行ないました。これは昨年迄続いていたのですが、種々の腕神経叢及び口症候群の臨床的および解剖学的検査を行ないました。」

昭和五十八年三月「胸郭出口症候群」の臨床的および解剖学的検査を行ないました。これは昨年迄続いていたのですが、種々の腕神経叢及び口症候群の臨床的および解剖学的検査を行ないました。

「これは昨年迄続いていたのですが、種々の腕神経叢及び口症候群の臨床的および解剖学的検査を行ないました。これは昨年迄続いていたのですが、種々の腕神経叢及び口症候群の臨床的および解剖学的検査を行ないました。」

昭和五十八年三月「胸郭出口症候群」の臨床的および解剖学的検査を行ないました。これは昨年迄続いていたのですが、種々の腕神経叢及び口症候群の臨床的および解剖学的検査を行ないました。

「これは昨年迄続いていたのですが、種々の腕神経叢及び口症候群の臨床的および解剖学的検査を行ないました。これは昨年迄続いていたのですが、種々の腕神経叢及び口症候群の臨床的および解剖学的検査を行ないました。」

昭和五十八年三月「胸郭出口症候群」の臨床的および解剖学的検査を行ないました。これは昨年迄続いていたのですが、種々の腕神経叢及び口症候群の臨床的および解剖学的検査を行ないました。

教室 便り

学位取得

次の方は、昭和六十二年十一月二日付で、福岡大学より医学博士を授与された。
出石 宗仁 (内科学第二)
論文名「Direct angiotensin II formation by rat submandibular gland kallikrein」

受賞

清永 明 (内科学第二)
第一回大学勤務医福岡県医師会賞
研究業績「好気性運動による血圧とホルモンの変化」

学术交流

昭和六十二年十一月以降の海外留学又は海外出張者について。
①研修先②目的③期間

海外留学

清水 正賢 (内科学第一)
①米国・マウントサイナイ病院②未定③62・12・64・11
曾爾 暹 (解剖学第二)①テキサス大学 ヘルス・サイエンスセンター (アメリカ)

新刊紹介

福大医学会が執筆した著書または単行本を以下紹介する。
①書名 ②発行所 ③発行年 ④価格

- 内藤 説也、小河原 悟 (内科学第二)①アメリカ (ニューヨーク市)②第10回国際組織適性ワークショップ及び会議に参加③62・11・11・28
中島与志行 (内科学第二)①イギリス (ケンブリッジ)②Cambridge Conference 出席のため③63・4・4・4・12
西園 昌久 (精神医学)①マレーシア②Conference on Medical Education, Western Pacific Region of W.F.M.E. について研究発表③63・3・7・3・12
西園 昌久 (精神医学)①マレーシア②WHO 保健研究諮問会議出席③63・4・7・4・12

来訪

昭和62年11月以降、本学医学部または病院を訪れた外国人学者はつぎのとおり ①所属 ②目的 ③来訪日 ④訪問先

- Francois Ladame, M. D. ①ジュネーブ大学教授 ②国際児童青年精神医学会プレコングレス福岡セミナーにて講演「思春期の精神病」③63. 4. 24. ④精神医学講座
Phillippe Jeammot, M. D. ①パリ第六大学教授 ②国際児童青年精神医学会プレコングレス福岡セミナーにて講演「思春期やせ症について」③63. 4. 24. ④精神医学講座
Prof. Tohru Yamada ①Department of Neurology, Iowa University, U. S. A. ②講演「Short latency somatosensory evoked potential and sleep」③63. 3. 11. ④小児科学講座
Jack G. Solia ①エクアドル ②内視鏡手術の研修のため ③62. 9. 1~63. 4. 15. ④外科学第一講座

編集後記
ニュース性にして紙面になったが、次号に期待するところ。ただ全国的入試改善運動の中で福大式入試が一部マスコミに取り上げられたので、そのユニークさを改めて紹介して頂いた。一方福大にも内外から留学生が増えつつあり、この人達の声を取り上げたい。海外便りに対して今回から常設欄にした。忌憚のない、われわれの反省にもなる声を聞きたいと思っている。(ST記)